

説教 『小さくされる奇跡』山本 護 牧師
聖書 サムエル記上 2:1~2/ルカによる福音書 1:46~48

「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった(ルカ 1:48)」。それゆえにマリアは「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえる(1:47)」。「わたしの魂、わたしの霊」とはどういう意味であろうか。内面の底から、深い感情がこみあげることなのだろう。

天使が「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい(1:31)」と告知し、マリアは「お言葉通り、この身に成りますように(1:38)」と応じた。マリアの深い心根は、胎にある内面のキリストから発せられた光なのか。そうかもしれない。救い主なる神が「目を留めた」ことは、マリアにすればまぎれもなく実感であり、理解の届かない尋常ならざる出来事であった。

片隅のマリアに起こった小さな事件は、キリストの降誕を開いていく大事件であった。神が「目を留める」とはどういうことか。その現実の中では、もはや隠れてはいられない、偽ることができない。恐れは取り除かれ(1:30)、田舎の無力な少女のまま、貧しいままで足りないことはもう何一つない。

マリアは続けて「今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう(1:48b)」と語った。今から後の人、つまり私たちが「神の目が留まった」マリアを「幸いな者」と言う。人間を蹂躪する混沌とした夜のただ中で、「Magnificat=マリア讃歌」をうたい、クリスマスの希望を証言する。

私たちは「主をあがめ、救い主を喜びたたえる(1:47)」。なぜなら、神が私たちにも「目を留めて(1:48)」くださっているからだ。「たたえる」とは「大きくする」という謂。何を大きくするのか。主なる神を大きくし、相対的に自分が小さくなること。世では自分を大きくし、美しくし、尊敬や地位を得ようとする。そのことで人と人の間に対立と段差が生じ、昂じると戦争やひどい搾取になる。その摩擦は人間を常に追い立てている。だがマリアは、そんな世とは逆に、心の底(魂)から「主を大きくし」、小さくされた器で救い主を仰ぎ見た。奇跡とは、こうしたことではないのか。世に流されず、かえって逆行するようなマリアの高潔さ。奇跡は確かに起こっている。神がそこに「目を留める」ゆえ。

紀元前 10 世紀の昔、指導的預言者となるサムエルの母ハンナも、マリアのごとくに讃美していた。「主にあってわたしの心は喜び~御救いを喜び祝う(サムエル記上 2:1)」。マリア讃歌には闘争的な表現もあるが(ルカ 1:51~53)、ハンナの場合も同様(サムエル記上 2:9~10)。ハンナとマリア、千年も隔てられているが、無力でしとやかであると同時に鉄火肌だということが共通している。神を大きくし、自分を小さくすることで共通している。ハンナの祈りにあるように「人は力によって勝つのではない(2:9)」。

マリアの胎には救い主が宿っている。状況から想定できる人々の侮蔑や律法の刑罰を考えれば、彼女の苦しみは相当大きいはず。だがマリアの霊は胎の「救い主を喜びたたえた(ルカ 1:47)」。天から降下して自分の一部となっている救い主は大きく、苦しむ自分は小さいから喜びなのか。神が無力な自分に「目を留めて」くれたことが喜びなのだろうか。分析して整理できるものでもないだろう。クリスマスという大事件は小さな母から起こる。世がいくら暗かろうとも、光は、火種は片隅に灯っている。



【おまけのひとこと】

苦しみがあり喜びがある 悲しみがあり希望がある これは計算し座標に描くことができるのか
方程式を幾つも重ねれば立体図形にもなろう だがマリアの魂と霊は 質量で測らねばなるまい